

虫を愛しみ、虫を恐れる

秋の日（陽）は、つるべ落とす、といいます。そして、秋の夜長がはじまります。軒下でさみしそうに鳴る風鈴の音、その下でにぎやかな虫の音。

私の子どもころは、「あれ松虫が鳴いてい
る……」、という童謡を誰彼となく口ずさんで
いたものです。当時は、ほとんどの家が木造。
しかも、古い家だと、建てつけがよくありま
せん。虫の音が家のなかまで聞こえます。い
や、家のなかにも虫が入りこんで鳴きます。

「あれ鈴虫も鳴きだした……」。静かに聞き
耳をたて、やがて眠ってしまったのが常でした。

現代の子どもたちには、そういう経験がな
いでしょう。コンクリート壁にアルミサッシ
枠のガラス戸では、外の虫の音などさえぎら
れてしまいます。窓を開けたとしても、テレ
ビやゲームの音で消されてしまいます。
「虫聞き」の情緒も半減しました。

たった半世紀ほどのあいだの変化です。
古くさかのぼってみると、虫聞きは、大人たちの行楽でもありました。たとえば、『江戸名所図会』には、「道灌山聴蟲」の図が描かれていきます。坂の途中に、女二人と虫籠を掲げた童子が一人。敷物の上には、男が三人。一人は、東に昇る月を眺めながら、何やらしたためていきます。また、一人は、チロリ（銅製の酒器）を手に酒の用意。そして、もう一人は、片肘かたひじをつき、足を投げ出してくつろいでいます。

「虫放ち会」という行事もありました。それぞれが自慢の虫を籠から放ち、鳴き声の優劣を競った、といっています。

もったも、虫の音を肴にしての行楽は、あくまでも「江戸の風ふう」ということでしょう。農山村では、あえて虫聞きを行事化することはありません。家にいて、耳をすまさずともさまざまな虫の音を聞くことができます。むしろ、農山村では、虫の害を恐れなくて

はなりませんでした。もちろん、松虫や鈴虫
ではありません。浮塵子や亀虫などの稲につ
く害虫の類です。そこで、その害虫類を払う
「虫送り」の行事が行なわれました。
その夜、子どもたちも参加して、松明を灯
して行列をなし、太鼓や鉦を叩きながら集落
内を巡ります。行列の中央に、藁人形をかざ
して歩くところが多かったようです。その場
合は、集落の外れで藁人形と松明を焼き捨て
て帰ります。「虫は外」とは唱えませんが、そ
こで虫を払ったとします。夏から秋のはじめ
にかけて、かつてはほぼ全国的に行なわれて
いた行事です。
「虫聞き」に「虫送り」。初秋の夜の行事。
いまや、高齢者の記憶遺産、というしかない
でしょうが……。